

基礎編課題⑧

【名前：】

ガイドをはじめとする状況描写を丁寧に書くことを前提に、1200文字程度の文章を書きましょう。
シチュエーション「喧嘩した後の気まずい再会をする二人」

「あ」

「あ」

全く同じタイミングで、全く同じ言葉が漏れる。声のトーンは秋穂の方がいくらか低かった。

「え、勇人さん。おひさー」

秋穂の隣にいた美月が声をかける。勇人は軽く頷いただけだ。

平日の昼間のショッピングモールだからと油断していた。地元とはいえ遊べる場所はある。だから秋穂は美月の誘いにのった。

それなのに、今もつとも会いたくない男に会ってしまうとは。

「勇人も面白い物？」

「……サックスのリード、買いな」

「え？ てことはライブ近いの？」

心臓が跳ね上がる。秋穂はただ下を向いていた。

「ライブあんの？ 言ってよー、秋穂。見に行くのに」

パシパシと背を叩かれる秋穂だが、何も言えない。言いたくない。

まさに一昨日、そのライブのことで勇人と大喧嘩をしたなんて。

秋穂が黙っていると、勇人が口を挟んだ。

「——いや、ライブじゃない。ただの趣味だ」

淡々とした声。特になにもなく、普通の声だ。

けれど秋穂の心にそれは深く刺さった。勇人はこんな喋り方をしていたか、と。

「あ、そうなんだ。えー、残念」

「すまん」

「いやいや、謝ることじゃないって。アタシが勝手に勘違いしていただけなんだから」

へへ、と申し訳なさに美月は笑う。秋穂はただ冷や汗を流す。

「もういいか。この後も予定があるんだ」

コメントの追加 [na2]: 誰と誰の会話かわかるようにしましょう。

コメントの追加 [na3]: 声に関する表現が「淡々」と「普通」の2つあります。繰り返しの印象があるので、別の部分を表現したいです。例えば態度や表情など。

コメントの追加 [na1]: この情報をもっと早く出したいです。そうでないと冒頭ではそもそもキャラクターが3人いることの把握もままならないためです。

「あ、そうだよ。ごめん、引き留めて」

「いや。……じゃあ」

そう言うと勇人は美月の横を通り、スタスタと歩いていく。そのままどこかへと行ってしまった

結局、秋穂は何も言えなかった。どう声をかけるべきなのかも、どう反応をすればよかったのかも分からない。ただ、この場は美月に感謝するしかなかった。

「秋穂。どうかした？」

美月が心配そうに秋穂の顔を覗く。ビー玉のように丸々とした瞳では、秋穂の様子がおかしいことを察している様子はなかった。

「あー……。うん、ダイジョウブ。大丈夫、ありがとう」

「そう？ ならいいけど。それにしても、勇人もこちら辺に来るんだね」

「楽器屋あるからね」

ショッピングモールの楽器屋ならモールのポイントがつくし、安売りをしている時がある。だから秋穂もよく勇人ときていた。

一昨日の夜に勇人から電話がかかってきた。それはバンドに限界を感じているといった内容で、普段の勇人なら言わないような弱みや愚痴ばかりだった。

驚いた。勇人がそんなことを言うなんて。バンドをやるうと言ったのはどこのどいつだ。

そう思うと止められず、気づけば秋穂も強く言い返していた。怒鳴り、傷つけ、傷つけられ、最後にどうやって電話を切ったのかも覚えていない。でも、あの夜はだいぶ泣いた。

けれどそれを聞く勇氣は、今の秋穂にはなかった。

「美月、行こ」

「あ、うん」

「どこ行きたいんだっけ。クレープ？」

「じゃなくて服屋。秋穂は本当に食べ物の話ばかり」

美月が笑う。それに釣られるようにして秋穂も笑う。

ただその心には僅かな影がかかっていた。

コメントの追加 [na4]: この弱みや愚痴に対して、秋穂はどう思ったのでしょうか？ 同意するのか、反発するのかで秋穂の行動に対する読者の印象も変わります。

コメントの追加 [na5]: 冷静さを欠いており、秋穂にとってバンドがどれだけ大事なものなのかが伺える良い文章です。

